

平成23年度 第1回道徳教育について考える会 協議概要

日時：平成23年7月22日

9:00～12:00

場所：ピュアリティまきび

平成20年度に設置した「道徳教育について考える会」は、本年度4年次を迎える。これまでの協議では、岡山県の「目指す子ども像」や、求められる就学前と高等学校段階の具体的な姿等を検討してきた。

本年度の会議では、次の2点について協議する。第1回は、特に、(1)を重点的に協議し、第2回の会議では、(2)を重点的に協議する。

なお、第3回の会議においては、道徳教育実践研究事業の推進校の取組についての協議を行う予定である。

協議

- | |
|--|
| <p>(1) 高等学校における社会貢献活動を通した道徳教育の在り方</p> <ul style="list-style-type: none">・社会貢献活動の意義・社会貢献活動の課題と考えられる解決策 等 <p>(2) 『心豊かなおかやまっ子』育成のプロセス（仮題）の検討</p> <ul style="list-style-type: none">・目指す子ども像に向けた、就学前から高等学校までのつながり・具体的な体験活動や取組の実践例、方策 等 |
|--|

(1) 高等学校における社会貢献活動を通した道徳教育の在り方

《社会貢献活動の意義》

- ・今の若い人は、視覚から得る情報が多いので、映像や写真で見たにすぎないことをあたかも実物を見たり触ったりしたかのように錯覚しやすい。その結果、具体的な事実に基づいて、自信を養うような機会が不足している。また、核家族の中で個室で育つ人が多いので、異年齢の人との接触が極端に少ない。これからは、具体的な人や物との接触を増やすとともに、多様性を認め、感性を育てる必要がある。そのためにも、社会貢献活動のような体験は、自己肯定感、自己安定感、自己有用感を育てる、とても良い学習機会である。
- ・社会貢献活動は、誰かのために何かをしたいという気持ちはあっても、どこで何をすればよいか迷っている高校生には、きっかけとなる。始める前は「心のふれあい」を意図していなくても、終わり頃には変わってきている。しかし、その変化は、こちらから聞かないと、彼らは、表現しないし表現方法も知らない。そのままにしておくと、フェードアウトしてしまう。活動の振り返りによってつなげていく必要がある。
- ・昭和57年から夏のボランティア体験事業を始めた。活動の前と後では感想が全く変わっている。だから、大人や教員はきっかけ作りをするだけでよい。その後のことについては、高校生に成長の中で気付いてもらえればよい。

《活動の事前事後指導の重要性》

- ・どういう目的で行うかをはっきりとさせる。結果の検証が必要である。PDCAサイクルを確立しないといけない。
- ・社会貢献活動をやりっ放しにしないで、PDCAサイクルで次へつなぐ必要がある。1回で終わらせないで次につなぐことが大切であり、そのためには、自分を振り返るだけでなく、いかに相手（受け入れ側）の意見を聞くかということが大切である。
- ・受け入れ側が与えられるだけでなく、お互いに与え合っている。受け入れ側も何かを与えており、貢献者と対等な立場である。高校生には、“慰問”に行くのではなく、対等な関係でいられる気持ち、心を伝えてほしい。
- ・社会貢献活動を始めるときの、学校での最初の一步が大切。特別支援学校では、知的に障害がある子どもたちには、視覚に訴えて実際の映像を見せたり、実際の場に連れて行っ

たりして下準備を丁寧にして、活動への意欲や見通しをもたせている。社会貢献活動のうったてでずれがあると、最後までずれる。最初の活動の提示をするときにどのようにしたらよいかということをはっきりと明かにしておく必要がある。

- ・ 障害のある又はあるかもしれない子どもたちにとっても、社会貢献活動は有効。何のためにするのか、自分は何を得ていくのか、といったことを通常よりも丁寧に指導していけば、そのような子どもたちにはとても良い体験になる。保護者の力を借りながら、活動したい。
- ・ よかったという感情が残らないと次へ進めない。力を与えに行くだけでなく、力をもらいにも行く。他人の多様性を認めて、同時に自分の多様性も認めながら、自分をマネジメントしていく力が今求められている。
- ・ 相手のことをもっと考える必要がある。常に相手の立場を考えることを事前事後で教えていく必要がある。
- ・ 人間が本来持っているものが道徳性である。それを育てる通路は、①知的理解 ②感性 ③体験の三つがある。しかし、体験をさせればそれで身につくというわけではない。事前事後の指導がとても大切。

《保護者・地域との連携》

- ・ 高校の保護者とのかかわりは、保幼小中のそれとは全く違う。保護者も巻き込んでくださいと高校にお願いしてほしい。社会貢献活動を始めるに当たっては、学校側から生徒だけではなく、保護者へも説明があるといい。活動には、PTAの在り方や考え方も加えてもらいたい。
- ・ 社会貢献活動が全校実施になるに当たって、目的を保護者にもきちんと説明すべき。生徒を真ん中において、学校と保護者が協力し合うことが大切である。
- ・ 社会貢献活動は、生徒の人間性を育てることが目的である。ある高校では、地域に根ざした学校を目指して、生徒会をコーディネーターとして、継続できるボランティアを考えさせて、地域貢献活動を進めている。
- ・ 社会教育としてみると、高校生の社会貢献活動は、受け入れる側の覚悟と理解が不可欠。地域で子どもを育てる、出す方と受ける方の双方で育てるという意識が大切で、学校で進められていることを地域や家庭にきちんと理解してもらわないといけない。学校が地域に出て行くときには、地域と学校をつなぐコーディネーターが必要となる。

《就学前からのつながり》

- ・ 社会貢献活動は、小中高のつながりの部分がはっきりしていない。つながりの部分で何かあるとよい。学習面だけではなく、体験してきたことを次の学校段階へ何かの形でつないでいかないと、一貫した道徳教育にならない。
- ・ 活動をして、何を感じるかはそれぞれの子どもの感性による。それは、それぞれの体験の受け皿であり、受け皿は、就学前から家庭などで培っていかねば、感動する力は育たない。やはり、感性の養成も就学前から積み上げていくことが重要だ。

(2) 「『心豊かなおかやまっ子』育成のプロセス（仮題）」の検討

- ・ 家庭の中に、今盛んにいわれている、ワーク・ライフ・バランスを入れてほしい。母子関係だけでは寂しい。ぜひ、父親の育児参加を取り入れたい。
- ・ 個の対応がこの表では見えにくい。集団の流れの中で、一人一人の子どもたちの変容はどうなのか、一人一人の子どもたちの身につけてきた自己有用感、どう育っていくのかが見えるようになってほしい。キャリア教育ともつながる。人として必要とされているという自己有用感を感じると人は育つ。この視点においてつながっているシステムができるとよい。
- ・ 「育成のプロセス」作成にあたっては、上からおりてくるものではなくて、現場から上がってくるものにすべきではないか。例えば、同一市内で、幼小中高とつながった道徳教育の研究指定をして、そこでの取組の成果等を検討していけば、「育成のプロセス」は、現場に根ざしたものになるのではないか。